

## 特集にあたって

埼玉大学 刀根 薫

昔からお役所仕事という言葉があるくらい、お役所は非能率的でスローモーであるという印象がある。一方、ORは効率性や最適化を追求することを身上としており、両者のへだたりは大と思われている。私は、埼玉大学大学院政策科学研究科で諸官庁から派遣されてくる現職の行政官にORの講義をしているが、ときおり、LPの講義で困ることがある。LPの制約条件を理解させることはやさしい。それに対して、目的関数を本当に理解させることには困難をおぼえる。利益を最大化するか、費用を最小化するという発想はわが愛する院生諸君には欠如しているらしい。「役所の費用は予算で決まっているのだから、それを厳正に執行することがわれわれの役目であって最小化などは論外である」という論法である。こういったお客さんを2年がかりで洗脳して（と思っているのは当方の思い過ごしかもしれないが）、修士論文を書かせて、もとの役所に送り返すと、彼らは再びお役所の世界に身を置くことになる。今度は、彼らがカルチャー ショックをおぼえる番であり、われわれはそれをリハビリと呼んでいる。少なくとも、数カ月を要するものらしい。

さて、本誌編集長の若山邦紘先生からこの特集をまとめるようにという厳命を受けたとき、私の脳裏を走り抜けたのは以上のようなことであった。そこで、ものは試しと比較的身近の人たちに当たってみた。こうして集まったのが以下の4編である。簡単な紹介をしよう。

本多氏による「防衛庁におけるOR/SA活動」はわれわれの待望久しかった論文である。防衛問題はそもそもORやシステム分析の発生源であり、今日用いられている多くの手法はここから生まれたことは周知のとおりである。現に、アメリカのOR学会では military ORのセッションがあって、制服組が研究発表をしているのは珍しいことではない。わが国の防衛庁においてもORが重要な役目をもっているらしいことは容易に想像されることである。本多氏はその歴史から現況にいたるまで、事例を交えて記述している。同氏は防衛庁のOR/

SAの責任者である。なお、防衛庁は40名以上のOR学会員を擁していることも特筆すべきことであろう。

沢田氏による「会計検査におけるOR的発想」はその役所の位置づけ上、効率性の追求が職務遂行のために必須のものであることを述べ、OR的発想の重要性を強調している。その上で、過去のいくつかの事例にもとづき、非効率的な予算の使途を指摘している。役所にORを定着させる一番手っとり早い方法は会計検査院をORのシンパにすることではないかと思わせる。

吉井氏による「農業共済団体の業務の効率性に関する分析」は農業共済事業のうち助成金の利用効率比較をDEAを用いて検討したものである。DEAはノンパラメトリックな多基準評価法として基盤を固めつつあり、公共部門では特に適用可能性の高いものである。本稿はこの分野の興味ある事例となっている。こういった手法をもとに公共性と効率性の関係（トレードオフ）について改めて具体的な議論がなされることを期待する次第である。

西岡氏による「建設都市行政とOR」は、東京を代表とするマンモス都市のインフラを支える役所の立場から、都市行政とORの関係について論じている。まず、パーソントリップ調査と物資流動調査について述べ、特に後者については新しい観点からの見直しの必要性を指摘したうえで、総合的なロジスティクス政策が都市行政にとって重要な課題となっていることを述べている。次に、具体的な実施例として「駐車場案内システム」を取り上げ、正確で迅速な情報の伝達と表示が都市生活に重要な要素であることを示している。

こうやって、これら4編をみると、役所とORは、それを意識するかしないかは別として、非常に緊密な関係を持ち得ることがわかる。われわれの学会にとって、潜在的な可能性の高い、有望な分野である。実学としてのORが本当の実力を発揮できるとともに、役割を試される分野でもある。関係者の一層のご努力に期待したい。